# 論文の和文要旨

| | |
|---|---|
| 論文題目 | アリー・シャリーアティーの神秘主義思想に関する宗教学的研究<br>──西洋との出会いから生まれたイラン的イスラーム── |
| 氏名 | 村山木乃実 |

本論文は、近年再評価が行われている、イランの現代知識人アリー・シャリーアティー（1933–1977）の思想を、彼の文学作品群「沙漠論」に注目し、彼が神秘主義に見出した可能性の分析を通じて、総合的に評価することを目的としている。これまでシャリーアティーは、イラン革命前夜の 1960 年代後半から 1970 年代に、シーア派に基づいた社会改革を試みたラディカルな知識人としてイラン国内外に知られてきた。しかし近年、イラン革命への貢献とは切り離し、シャリーアティーの思想を再評価する動きが進んだことで、これまでのイメージからはかけ離れた、詩的な神秘的世界に感応する人物でもあったことが明らかになってきた。このシャリーアティーの思想の再評価の再検討を迫るような新しい潮流を横断して研究者の関心を集めてきたのが、「沙漠論」である。しかしながら、「沙漠論」に関わる先行研究には、シャリーアティーの神秘主義理解と「沙漠論」の特徴を捉え、その上で両者の関連を詳細に検討する視点が欠けていた。そこで本稿では、まずシャリーアティーが示す神秘主義への理解がもつ特徴を明らかにした。次に、「沙漠論」を分析し、シャリーアティーの神秘主義と「沙漠論」の関連性を分析した。その上で、シャリーアティーの神秘主義の捉え方が、彼のシーア派改革思想にいかに接続されているのかを明らかにする試みを行なった。

第 1 章「生涯と作品」では、シャリーアティーの思想を読み解く上で必要な作業として、シャリーアティーの生涯と作品を、シャリーアティーの生涯を「幼少期から大学入学まで（1933–1955）」、「マシュハド大学時代（1955–1959）」、「フランス留学時代（1959–1964）」、「帰国からホセイニーイェ・エルシャード閉鎖まで（1964–1967）」、「逮捕から客死まで（1972–77）」の 5 つに分け概観した。本章で明らかにした事柄は、次の

通りである。まず、世俗化が進むイラン社会の中で、シャリーアティーは生涯を通して、民衆によるシーア派社会変革を目指していた。シーア派こそ、イラン人たちを救済し、社会を正しい方向に導くことができると考えていたのだ。

次に、フランス留学を経て打ち出された「アリーのシーア派主義」は、シャリーアティーのそれまでの知識と経験の結実である。シャリーアティーは「アリーのシーア派主義」を、イラン人のために必要なイスラームとして提示した。しかし、結局のところ、イスラームと西洋思想が複雑に入り組んだシャリーアティーの思想は同時代のイラン社会で理解されることがなかった。シャリーアティーは社会で孤独であり続けたのである。

第2章「シャリーアティーの『エルファーン』」では、シャリーアティーが理解する神秘主義「エルファーン」を検討した。本章で明らかにしたのは、シャリーアティーは神秘主義に人間のあらゆる活動の源泉を見たということである。それは、シャリーアティーの思想に、新たな息吹をもたらした。

「エルファーン」の形成には、「近代的神秘主義」とイスラーム神秘主義の影響が認められ、シャリーアティーは「エルファーン」に自らが直面している問題全てを解決できるための鍵を見たと考えられる。普遍性とイラン文化の固有性の両方に根差すことができ、元来言葉にすることが不可能なものでありながら、ペルシア神秘主義文学の伝統の力によって表現できるのは、「エルファーン」でしかありえないとシャリーアティーは考えていた。

第3章では、「沙漠論」の4つの作品、すなわち『沙漠』、『降下』、『独白』、『親しい友人たちとの対話』を概観した。シャリーアティーの思想的軌跡が表れた「沙漠論」で展開される彼の思想や主張は、他の著作や講演にも通底する。だが、「沙漠論」が他の著作や講演と決定的に異なるのは、そこにシャリーアティーによる自らに向けた語りがみられることである。「沙漠論」の基調を成す自己への語りは、シャリーアティーの神秘主義の捉え方を見事に表している。

イラン社会で誰からも理解されることのなかったシャリーアティーは、この世界に耐えきれない感覚に突き動かされ、自身に対して語らずにはいられなくなる。特筆すべきは、シャリーアティーの自己へ向けた言葉が、音楽性を帯びている点だ。このようなシャリーアティーの自己への語りは、第2章第3節「詩と音楽」で指摘した、シャリーアティーの言語芸術にたいする評価の確固たる証左である。

第4章では、前章の考察を踏まえ、シャリーアティーの自らに向けた語りの特徴を分析した。本章では、次の4点を明らかにした。まず、「沙漠論」にみられるシャリーアティーの自己へのあてた語りは、ペルシア神秘主義文学に支えられている。ペルシア神秘主義文学のなかでは、一見矛盾するような普遍性と固有性の2つが溶け合う。さらに、ペルシア文学に依って立つことで、知識人と民衆の連帯も期待できる。神秘主義にイランの現状を打破する可能性を発見したシャリーアティーは、自らが意図する内容、表現、感情全

てを、ペルシア神秘主義文学のなかに捉えたのである。

次に、「沙漠論」で表現されている２つの孤独、すなわち神との別離から生じるものとシャリーアティーがイラン社会で抱えていたものは、シャリーアティーの自らに向けた語りのなかで重なり合うということである。そうしてこそ、シャリーアティーはイマーム・アリーの孤独への真なる理解に至ることができたのだった。「沙漠論」は伝統を突き破るシャリーアティーのシーア派思想の土壌であったといえるのである。

３つ目は、シャリーアティーによる孤独に対する積極的な意味づけは、神と人間の近さを証明するまでに、広がりを持つ点である。シャリーアティーは、自らが作り出したシャーンデルという人物に託して、神がいかに孤独であるかを、そして孤独であったからこそ天地創造をし、最終的に人間を創造したのであると、語る。そしてそれは東洋的な世界観でありながら、実は東西を問わず人類に共通するものであることを示唆する。

４つ目は、民衆の感情に訴えかける『沙漠』と『降下』は、「アリーのシーア派主義」が社会で実現されるために必要不可欠な民衆との一体化のための手段として位置づけることができる点である。言葉による分断を解消し、民衆を奮い立たせることのできる手段として、シャリーアティーは豊かな詩の伝統を持つペルシアの文学に希望を見た。

本稿が結論として述べるのは次のことである。シャリーアティーは、革命前のイランで民衆の心にイスラームを蘇らせた、近現代イランの思想を読み解く上での巨大な座標軸となる思想家である。イラン革命後、シャリーアティーは革命のイデオローグと位置付けられた一方で、社会から距離を置き、一人神秘的世界へと沈み込む厭世的な思想家としても知られてきた。こうした２つの評価は、シャリーアティーを、二面性を持った人物、二つの顔を自在に使い分けた人間であるかのように見せる。しかしながら現実には、彼は自分の抱える矛盾を自覚し、それを超克すべくもがいていた。本稿で詳細な分析の対象としてきたシャリーアティーの後期の作品群「沙漠論」は、まさにその精神的な格闘の場である。その格闘を支え、分裂しかねないシャリーアティーの思想を統合したのは、「エルファーン」であった。「エルファーン」を追い求めているかと思えば、「エルファーン」に掻き立てられるように展開する自己への語りは、シャリーアティーが自らを救済する行為でもあったともいえる。

これまでさまざまな評価を下されてきたシャリーアティーについて、その精神世界の内奥にまで踏み入ろうとするならば、「沙漠論」を避けて通ることは決してできない。「沙漠論」によって初めて、シャリーアティーという、激動のイラン社会を生きた、一人の知識人の思想を理解できると言ってもよいだろう。イスラームの内側に、人類共通の普遍的なメッセージとイランの人々だけが持つ文化的固有性の両方を見出そうとしたシャリーアティーの試みは、古典的な解釈の外側に広がる、豊かで広大なイスラーム思想の一端を示しているのである。